

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑰

今回紹介する資料は、雑誌「少年俱楽部」の付録である。同誌は1914(大正3)年に大日本雄弁会(現講談社)が創刊した雑誌であり、少年たちはその付録を楽しみにした。

12)年に日中戦争が始まるとき、付録も戦争を反映したものが多くなっていった。

本資料は40(昭和15)年1月1日発行号の付録で両面刷りとなっている。「帝国軍艦大画報」から見てみよう。長門・山城・金剛・伊勢などの戦艦、妙高・高雄などの巡洋艦、赤城・加賀などの航空母艦、そのほ

か本来は軍艦に属さない駆逐艦や潜水艦なども含め、約300隻の艦艇がカラーペンで描かれている。

本資料に圧倒されるのは、立すいの余地がないほど艦艇が描かれているためである。しかも、一隻一隻き分けられ、艦艇の種類や艦名を含め、多くの情報が記載されている。

また、裏面には「帝国陸軍兵器大画報」として、戦車部隊、爆撃機・戦闘機などの航空部隊、榴弾(りゆうだん)砲・加農(かのん)砲などの砲兵部隊、給水・衛

なく、方向や角度を変えながら、遠近法を用いたり、兵器操る兵士を描いたりして、躍动感を創出している。

正面から整然と描くのではなく、方向や角度を変えながら、遠近法を用いたり、兵器操る兵士を描いたりして、躍动感を創出している。

当時の少年たちは、軍艦や兵器のイラストを見て、軍隊への“憧れ”を強くしたことだろう。戦争が長く続く時代、やがて少年たちは徴兵検査を受け、兵士として戦場に赴いた。しかし、そこで“憧れ”的兵士像を探すこととは難しく、戦争の厳しい現実と向き合わなければならなかつた。

私たち戦時資料を見ると、当時の人々に共感しながらも、現在の視点で比較することが大切ではないだろうか。戦時資料が発するメッセージをどうすれば分かりやすく伝えることができるか。戦後75年の今年、展示を行う者として、改めて自問したい。

雑誌「少年俱楽部」の付録



1940(昭和15)年1月1日発行号「少年俱楽部」の付録「帝国軍艦大画報」

—県歴史文化博物館所蔵

軍艦や兵器多色で描く

ればならなかつた。

私たち戦時資料を見ると、当時の人々に共感しながらも、現在の視点で比較することが大切ではないだろうか。戦時資料が発するメッセージをどうすれば分かりやすく伝えることができるか。戦後75年の今年、展示を行う者として、改めて自問したい。

(専門学芸員・平井誠)
△月2回掲載します

生などの自動車部隊、浮囊(ふのう)橋を架ける工兵部隊などがカラーペンで描かれている。裏面で目がひかれるのは、駆逐艦や潜水艦なども含め、約120種類の兵器がカラーペンで描かれている。

（ふのう）橋や鉄舟(てつしゆ)など、約120種類の兵器がカラーペンで描かれている。